

全体の6割以上は完治

日本では1950年頃からがんによる死亡数が増加し、1980年頃には死亡原因の第1位となり、現在では他の死亡原因(脳血管疾患や心疾患)の2倍を占めています。

しかし、がん治療は年々進歩し、現在では一部のたちの悪いがんを除いて、がん全体の6割以上が手術などの治療により完治し得ます。昔考えられていた「不治の病」ではなくなりました。

しゅよう 「腫瘍」≠「がん」

日常診療をしていてよく感じるのは、「腫瘍」と「がん」という言葉の意味が一般の方に理解されにくいということです。

「腫瘍」とは“自律性増殖(勝手にどんどん発育する)の能力を持った病変”と表現でき、「良性腫瘍」と「悪性腫瘍」に分けられます。「悪性腫瘍」=「がん」です。

がん(=悪性腫瘍)と良性腫瘍の違いは、良性腫瘍よりも自律性増殖能が旺盛(自分勝手に大きく育つ速度が速い)で、「浸潤(がんと隣り合わせた組織にしみ入るように入り込んでいくこと)と転移(がんが発生した臓器とは離れた臓器に飛び火すること)」の能力を持ち、個体を「悪液

質」(がんが栄養を横取りして、がんが発生した個体に栄養が行かなくなり栄養失調になって、体力が弱っていくこと)に陥らせ、死に至らしめることです。

がん患者さんから「私のがんは悪性ですか？ 良性ですか？」という質問も受けることがあります。「たちが悪いですか？ いいですか？」という意味だと思いますが、がんは全て悪性です。良性腫瘍はがんとはいいません。



「消化管がん」の治療は日進月歩

特に胃、大腸、食道、肝臓、膵臓、胆嚢、胆管などの消化器がんの発生率は高く、がん治療の主役となっていますが、胃、大腸、食道といった「消化管がん」の早期診断技術と治療法は進歩し、早期がんが内視鏡で多く見つかるようになり、「内視鏡的切除」という体に負担の少ない手術も多く行われるようになりました。

ただ、膵臓、胆嚢、胆管に発生するがんは今も早期診断が難しく、また、治療により完治する率が低いのも現状です。